

平成23年度第2回特別支援教育保護者研修会報告

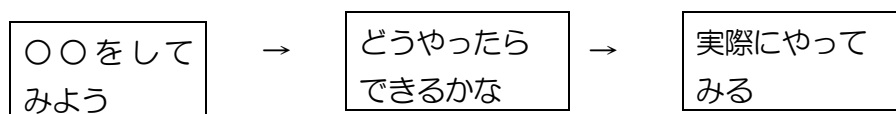
- 1 日時 平成24年2月16日(木) 9:30~11:15
- 2 場所 江別市市民会館 3階37号室
- 3 演題 「子どもたちへの理解を広げるために～感覚統合を考える」
- 4 講師 江別市子ども発達支援センター長 谷藤 弘知 氏
- 5 参加者数 保護者46名、放課後児童会職員31名、教員17名、その他36名
合計130名(受付名簿上、詳細別紙)

6 講演概要

- ・感覚統合は作業療法の一つ
- ・アメリカの作業療法士の就職先で一番多いのは学校。学校の中に作業療法士が入って支援している。日本の現状は、特別支援学校に何名か入っている。
- ・感覚統合は、学校の中でも十分生かしていけるものだと思う。
- ・巡回相談で学校を訪問し、お子さんの様子を見ると、発達障がいだということではなく、何か特別な配慮を必要とするお子さんではないかなという気がするお子さんもいる。
- ・特別な支援が必要な発達障がい児童の特徴について簡単に説明する。
 - 注意欠陥多動性障がい
 - ・・・集中できない、順序だてての行動が不得手、落ち着いてられない、多動行動、衝動的言動
 - 高機能自閉症、アスペルガー症候群
 - ・・・他人の意図理解不得手、場の雰囲気理解不得手、こだわり行動、パニック行動
 - 学習障がい
 - ・・・読み取り能力低下、計算力低下、推論不得手
- ・発達障がい児への過った見方として、
 - 注意欠陥多動性障がい
 - ・・・しつけが悪い、教師のいう事を聞かない、反抗的だ、だらしない
 - 高機能自閉症、アスペルガー症候群
 - ・・・ルールを無視する、変り者、気持ち悪い、何を考えているのかわからない
 - 学習障がい
 - ・・・怠けている、勉強する気がない、まじめに復習していない、知的障害がある
- ・発達障がいの子どもの生きにくさというのがある。
- ・生きていく力が弱まるのは、ソーシャルスキルの低さ、学習の困難さ、自尊感情の低さによる。そのため学校での、教育のしにくさ、家庭での子育てのしにくさにつながるので、周りでしっかりと支えてあげないといけない。
- ・学校や生活の中で、子ども達が見せる行動や振る舞いは、周囲が「見た」時に問題行動として「見える」部分の影響があまりにも大きいために、その子の本質を見抜くことが困難にしているようだ。
- ・そうならないよう専門的視点や切り口が必要になると思う。

- ・「感覚統合」について説明する。
 - ・「感覚統合」理論であるが、子どもたちの生きにくさ、生活のしにくさを感覚や運動の視点から理解し、支援する作業療法の考え方の一つとされている。
 - ・感覚の問題には、4つがある
 - ① 触覚が過敏（触覚防衛反応）
 - ② 聴覚が過敏（聴覚防衛反応）
 - ③ 固有感覚が鈍感
 - ④ 前庭感覚、触覚、固有感覚の探求
 - ・感覚統合とは何かというと、「脳の中で様々な感覚情報を環境にうまく適応できるようにまとめ上げるシステム、感覚を頭の中で組織化すること」である。
 - ・どんな感覚があるかということ、視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚といういわゆる五感の他に、「前庭感覚」、「固有受容感覚」がある。
 - ・これは身体を通して様々な環境を探索しつつ、学習していくのに重要な感覚である。
 - ・「前庭感覚」とは、身体の傾きやバランスを感じ取る感覚で、姿勢や運動、眼球の運動等に関っているものである。
 - ・「固有受容感覚」とは、筋肉の緊張を調節したり、関節の動きを感じる感覚。姿勢を保ったり、運動するときに働く感覚」である。
 - ・「触覚」とは、感触を識別したり、嫌いな刺激等危険を察知する感覚である。
-
- ・バランスを取るときには視覚の情報が大事。視野を安定することでバランスをとっている。
 - ・しかし、目をつぶっても全くバランスをとれないことはない。それは目をつぶっても体で感じている感覚があるからである。
 - ・我々は、いろいろな感覚を体でキャッチして、脳の中で整理して行動できている。
 - ・聴覚、前庭覚、固有受容覚、触覚、視覚がしっかりと入ってきて、それを脳の中で処理できていくと、姿勢を保つ、バランスを取る等体をうまく使えることができる。
 - ・体をうまく使えるようになると、自分の体をイメージしたり、なれない運動を組み立てる力もできてくる。
 - ・次に目で見たとこに正確に手を伸ばしていくとか、指を使うとかができるようになる。
 - ・そして、形や音も区別できるようになる。だんだん分化する。
 - ・最終的にきちんとした行為、行動ができるとか、言葉をしっかりと使うとかになる。外から入ってくる刺激が脳の中で整理されることが大事である。
-
- ・感覚統合に故障が起きると、資料のP16のようになる。
 - ・前庭覚と固有受容覚の統合不全、バランス能力がとても低くて、ぐにゃぐにゃしている子だとイメージしてください。
 - ・次に積み重なってくるのは知覚レベルの問題。
 - ・物事をうまく判別することができない。筋肉がやわらかいとしっかりと情報が入ってこない。素早く運動することができないし、手や体を上手に使うこともできない。
 - ・外界の除痛経を正しく理解することが難しくなる。

- ・理解することは認知することだから、知覚のレベルで問題が起こってくると認知レベルにも問題が起こってくる。この状況がどうして起こったかが分からなくなる。だから適応した行動がとれなくなる。
- ・このように、ベースとなる感覚情報の整理が大事になる。
- ・感覚統合に故障があると、具体的にはこんな状況になるだろうか。
 - 「手が少しでも汚れると気になる」・・・脳の中に有害の刺激として入っている
 - 「はだしで砂場や芝生に入れない」
 - 「いくら回っても目が回らない」・・・リアルに刺激が入るので自分の意識を高めることができる。視覚的刺激が好きな子
 - 「遊んでいるうちに、すぐに床に寝ころがってしまう」
 - 「つま先歩きが目だつ」・・・ふくらはぎに強い刺激をいれている状態。
 - 「ギュッとしがみついたり、友達を押ししたりする」・・・固有感覚が入って来て強い触覚刺激が入り気持ちがいい。
 - 「必要な音とそうでない音の「より分け」がうまくいかず、大きな音や特定の音に過敏に反応する」・・・何でもかんでも音を拾ってしまう子。
- ・感覚、運動での課題は、「筋肉が柔らかく、バランスを維持できない」、「触覚・固有感覚の情報を上手に取り込めない」、「感覚をひとまとめに(統合)できず、運動が拙劣になる」、「運動を観念化できない(方法がわからない)」、そして、「身体図式や運動行為(運動企画)が発達しにくい状態になる。(自分の身体がよくわからない)」である。
- ・運動をイメージ化することができなくなると身体図式や運動企画が発達しにくくなる。
- ・「身体図式」とは、自分の身体の部分とそれらの関係についての動的な地図のことで、自分の位置関係について理解できているかどうか、というものである。
- ・身体図式が育ってくると運動を上手に組み立てる、企画することができるようになる。
- ・「運動企画」とは、身体図式を使って運動を組み立てる一連の流れで、さまざま感覚や運動の経験とその時の感覚体験をもとにして新しい運動を作り上げる能力である。



- ・「身体図式」と「運動企画」について(例：自転車のり①)
 - 登録 → 観念化 → 運動企画
 - 「自転車がある」 「よし乗ってみよう」 「どうやって乗る」「ああして、こうして」
- ・「身体図式」と「運動企画」について(例：自転車のり②)
 - 実行 → フィードバック → 適応反応 → フィードフォワード
 - 「さあ いくぞ」 「あれ、ころんだ」 「乗れた、乗れた」 「スイスイだ」
- ・感覚面、運動面に対する課題解決と手段について、感覚系からのフィードバックを得ながら、空間でアクティブに身体を使った運動を繰り返すことで、身体図式を発達させ、環境にあわ

せた行動を促す

- ・サーキット遊びでは、「にぎる」といことをどんなことか知るために、バーを横に渡ったり、縦に渡ったり、いろんなつかむパターンを確認していくと、手の「つかむ」という情報（触覚、固有覚）がしっかりと入ってくる。
- ・スロープを登る場面では、どこで登れない状況が起こっているのかということをしかりと見て、情報を提供してあげることによってできるように可能性が増える。
- ・ロープ引きで、実際に引っ張れた場合、「ロープを引っ張れてよかったね」というのもそうだが、他の友達と一緒に同じ遊びに参加できたということ、楽しい場면을共有できたという事が大事である。
- ・「できないから参加しなさい」、「その場を提供する」と言うだけでは、なかなかうまくいかない。
- ・感覚とか運動と言う切り口で解釈して支援してあげたときにうまくいくこともある。
- ・プールの後の洗体の場面は、他の子と接触できるよい機会になる。
- ・この子は手の使いかたで、指は使っているが手の平を使っていないのはが変である。
- ・普通は自分の腕の形にそって手を洗っている。そういう時は手順を示してあげていく（情報を与えてあげる）とできる。
- ・ものの探索には、触覚と固有受容感覚が重要。
- ・何を知りたいかによって手の使い方が違う。世界を効果的に探索するためには、多様な手の運動と形態を学習しなければならない（能動的な触りが重要）

- ・感覚統合を促す遊びとして、「リズム・リトミック」「小麦粉粘土、スライム」「サーキット」などがある。
- ・不器用な児童への支援（道具の活用）もあるので、機会があれば、試してみてもどうか。

- ・まとめ
 - 1、感覚は共感的理解の発達に寄与
 - 子どもの心は、初期のコミュニケーションの経験が記憶に書き込まれることを通して形作られる。
 - 2、感覚は運動を通して環境世界を教えてくれる
 - 机上の学習や知識の積み上げやつめこみだけで、人として育てている訳ではない。
- ・感覚統合について説明したが、今回の内容を参考に、子ども達への理解を広げていただければ嬉しいと思う。